

518.8
N39

企業城下町の 都市計画

野田・倉敷・日立の企業戦略

中野 茂夫〔著〕

寄贈図書

筑波大学出版会

09008401

はじめに

本書が企業城下町という特殊な都市をあえて取り上げたのには二つの理由がある。まずひとつは、企業と都市との関係が顕在化する対象を取り上げることで、産業に特化した日本近代都市計画の特質を探ることができると考えたからである。もうひとつは、近代産業遺産を生かした町づくりに向けて何よりも大切なのは生産システム全体の歴史的な理解であり、その方法論を提示するにあたって企業の生産システムが都市空間にそのまま反映される企業城下町は格好の題材だと考えたからである。

一九世紀後半、日本では本格的な工業化がはじまった。工場制機械工業の登場によってこれまでにない速度と規模で工場労働者が増加するとともに、都市化が進行し、深刻な都市問題が発生した。しかしながら道路や住宅、上下水道といった人々の暮らしにかかわる都市施設の整備は著しく遅れた。その結果、日本の近代都市計画に対しては総じて否定的な見方がなされてきている。だが、日本が世界的にもほとんど例をみない経済成長を遂げ、工業大国になったという事実には照らし合わせて考えてみると、日本の都市計画は「産業化」という面では一定の成果を上げてきたのではないかという気がするのである。

第二次世界大戦前の地方財政は、補助金や交付金が限られていたこともあり、かなり逼迫していた。したがって市町村では都市施設を建設するにあたって予算を重点的に配分する必要がある。おそらく工業都市では、生産に関連する施設が他の施設よりも圧倒的に優先するかたちで建設されてきたに違いない。そしてそのアンバラ

ンスさこそ、日本の近代都市計画の特徴であり、また課題でもあったと考えられる。

企業城下町は「企業」と「都市」との関係がもつとも単純化された構図になっており、企業の都市に対する戦略が行政の施策に直接反映されていたに違いない。したがって、そこで行われた工業開発における事実関係を丹念にみていくことで、産業に特化したアンバランスな都市計画がいったいどのようなものだったのかを具体的に解き明かすことができよう。企業城下町の都市計画を歴史的に明らかにすることは、工業立国・日本における近代都市計画の特質を探ることなのである。

さて、一九九〇年代以降、長引く不況と産業構造の変質によって工場の閉鎖や海外移転が広範に展開され、企業城下町は斜陽の町として語られることが多くなってきた。こうしたなか、近年では町おこしに産業遺産を活用しようという動きがはじめている。

そのことは産業遺産の保存と活用を願う筆者にとつても歓迎すべき出来事なのだが、どうしても物足りなさを感じてしまう。それは何かというところ、産業遺産の保存が歴史的価値の高い希少な遺産に限られているという点である。たしかに日本の近代化を象徴する旧富岡製糸場や旧下野煉化製造会社煉瓦窯等がかげがえのない産業遺産であることは間違いないし、国指定重要文化財として保存されることには異論がない。しかし近代産業の場合、地域の広い範囲に工場だけでなく鉄道や倉庫、発電所、給水所、住宅などさまざまな施設が配置され、それらが全体として機能することによって「大量生産」を実現したのである。つまりそうした生産システム全体が保存対象となり得る産業遺産といつてよい。

欧米に目を向けてみると、アイアンブリッジやニュー・ラナークなど世界遺産に登録されているところでは個々の遺産だけにとどまらず、工場や橋梁、工場労働者の住宅など、生産活動の場全体が保存の対象になっている。そこを訪れる人々を魅了している。一方、国内でも、かつて鉱山町として栄えた小坂や足尾などでは、町全

体を産業遺産の博物館とするエコ・ミュージアム構想が打ち出されている。だが、その主な内容は産業遺産を中心とする拠点事業になっており、生産システム全体を保存するというところまでいっていない。

文化庁では、面的な保存手法として重要伝統的建造物群保存地区制度を設けている。本書で取り上げている倉敷では、倉敷川畔がこの制度によって保存地区に選定されており、旧大原家東邸や大原美術館といった近代化遺産も保存対象になっている。ところが保存地区から一歩外に出てみると、ここ一〇年ほどのあいだに近代化遺産は次々に壊されており、実は危機的状况に瀕している。その象徴的な出来事がチボリ公園の建設であり、日本の紡績業のなかでも画期的な試みであった「分散式家族的宿舎」や「田園都市風住宅」が取り壊されてしまった。もちろん旧市街地のすべてを保存地区に設定するわけにはいかないが、紡績業の展開と都市形成との関係についてももう少し理解を深めていけば、少なくとも保存施策の見直しは行われただろうし、倉敷の近代化にとって大きな意味をもつ産業遺産については部分的にでも保存することができたに違いない。

こうしてみてみると近代産業遺産の保存は、都市全体に広がる生産システムについて空間的に理解することからは始める必要があるだろう。そして本書の企業戦略から都市形成の歴史を読み解く方法は、それに向けたひとつの試みなのである。

【凡例】

- 1 史料の引用にあたって漢字を適宜常用漢字に改め、句読点を補った。欠字は□と表記した。
- 2 正字は原則として略字表記に統一した。
- 3 読みにくい語句には適宜ふりがなを付した。
- 4 本書に引用している写真・絵葉書のうち、出典を明記していないものはすべて筆者撮影もしくは筆者所蔵のものである。
- 5 引用文献、出典において公刊書、雑誌、新聞等はすべて『』と表記し、これらに収録された論文・史料等は「」で示した。また元史料はいずれも「」で示した。
- 6 現存する産業遺産については（ ）内に説明を補足した。